
未来の伝説

skylark

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来の伝説

【Zコード】

Z0223W

【作者名】

sky1ark

【あらすじ】

世界を守るために立ち上がった勇者と、勇者を倒し真の支配者になることを信条とする魔王。さらに目的の不明な魔法使いや第3勢力が現れ、世界の霸権を巡る戦いが始まろうとしていた。しかし、たび重なる世界の危機を前に頼みの勇者は記憶を失っていた。

これは記憶喪失の勇者と我が道を行く魔王の物語。

プロローグ

魔王が世界に対し 宣戦布告した。その噂は大陸の端にあるのどかな片田舎にさえ届いた。その片田舎に住む農家の三男に生まれた俺が・・・まさか噂の魔王と戦う運命を背負つてるなんて。世の中わからないものである。でも、不思議と戸惑いは少ない。

俺を勇者と認めた聖剣『シコトラウス』を田の前に掲げてみた。手に入れてからまだ三日と経つていないのに俺の手によく馴染んでいる柄。刀身が青白く光っているこの聖剣を見ているとやる気がみなぎつてくる気がする。

「・・・よし・・！」

ゆっくりと腰の鞘にしまってから顔を上げる。

そして俺は、この世界を守るために一歩を踏み出した。

その1

「……は？」

湿つた石の上から頭上へと田線を移動させる。
木々の隙間から、青い青い、今まで見たこともないくらい青い空
が見える。

「……今まで……？」

おかしい。『今まで』って、今から前って……どんなだつたっけ？

「思い、出せない……？」

今はわかる。

俺はどつかの川辺にいる。……の川辺かはわからないが。そ
して多分周りは森だ。木しか見えないからまず間違いないだらう。

「……」

で、それ以外は？

「……」

困った。どうじよつ。俺つていつたい誰で何してたんだ？

いまいち働かない頭を振つてとりあえず川の水に浸かっていた下
半身を陸に引き上げる。

ふむ、大地が体にしつくつくるな。どうやら俺は陸上の生物らしい。
・・・・なんで陸上の生物が水に浸かつてたのかよくわから
ないが。

半身浴はんしんよくしてたとか。服着たまま。

「あり得ない」

眩まぶいて立ち上がる。少しふらふらするが問題なさそうだ。でもち
よつと頭かしらがさきずきする。ふと『記憶喪失きおくじょうしつ』という単語たんごが頭に浮か
びあがつてきた。

記憶喪失。きっとそれが今の俺の状態だ。

それじゃあ考えたつて俺が何者でなんでこんなことにいるのかと
かわかるわけないな。うん、俺は悪くなかった。それがわかればま
だ良いだろう。・・何が良いのかと問われたら答えられないが。

「さて、これからどうしよう?」

氣分転換きふてんかくに声を出してみる。誰も返事をしてくれないのが無性むじやくに
寂さびしかつた。しかしそれも仕方がない。周囲には誰もいないのだから。

「・・・とつあえず服を乾かさないとな

独り言ひとりごとを言いつつ腰に手を当てる。

「ん?」

硬いものが腰にぶら下がつている。腰から外して顔の前に持ち上

げてみた。

剣だ。鞘^{さや}と外したからどんな刀身なのかわからないがどうやら細身の両刃剣らしい。柄^{つか}を握^つてみると、手にしつくつとよく馴染^{なじ}む感触がする。

ひょっとして俺は剣で身を立てるため必死で修業したとか、騎士になりたくて家を飛び出してきたとか、そういう経歴の持ち主ではないだろうか。よくよく手のひらを見てみるとマメがつぶれて固くなっているし、どうやら熱心に剣の稽古^{けいこ}に励んでいたようだ。我がことながら一生懸命な人間には好感が持てる。俺は頑張り屋な剣士志望（仮）だということにしておこう。

さて、ではそんな俺がこんなところに居るのはなんでだ？

・・・・・ 考えてもわからないことは考えないに限る。ビリしたつてどうしようもないんだから。

足元はまだ多少覚束^{たしょく}ないが、ここでこうしていても埒^らが明かない。とにかく一步でもいいから歩きだすことが大切だ。そう考えて森の中に踏み込んでいく。

前後左右見渡しても木しか見えない。これは本格的に危ない気がする。やや遅い危機感^{ききがん}を抱いた俺は少し焦^{あせ}りだした。焦りすぎて、足元を見ないで進んで木の根に引っかかったり、低い枝に頭をぶつけたり、とにかく散々（さんざん）な目に合つた。

そのせいか、彼が声をかけてくるまで俺はその存在に全く気が付いていなかつた。

「君、そっちに行くと森の奥に入つてしまつよ。人里に出たいなら逆方向だ」

穏やかな聲音でそつと言ったのは、優しげな微笑みを浮かべた青年
だった。

のうじん
濃紺の髪。
あお
蒼い瞳。

全身を隠す黒いローブ。

表情を見る限り悪い人ではなさそうだけど、何故だらう。あまり
関わり合いになりたくない雰囲気を醸し出している気がする。

俺とは知り合いではないようだし、善意で声を掛けてくれたんだ
ろうけど、正直声をかけないでほしかった。なんだかそう思わせる
人だった。

・・・俺つて実は人間不信にんげんぶしんだったのか？記憶をなくす前の自分が
わからない。それって結構不安なことだつたんだな。初めて知つた
よ。

いや、初めてではないかもしない。ひょっとして記憶を失うの
は日常茶飯事じつじょうちゃはんじとか。そんな日常は嫌だがそつだつたら面白いだらう
な・・。「毎日が新鮮！」みたいな。

「て、そんなわけないし・・・」

げん現に今記憶喪失になつていて楽しいことは一つもない。

「どうかしたのかい？」

青年が覗き込んできた。心の内まで見通されそうでつい顔を逸ら
してしまつた。失礼かな、とは思つたがどつさの行動は制御不能だ。そ

「いや、何でもない・・です」

「ふうん・・・。そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。勇者を襲う

なんてリスクの高いことではないから』

「・・・・・？」

彼の言葉が引っかかった。今、変な単語を聞いたよつな・・・?
何か、聞き逃してはいけないことを言つたような気がするが・・。
しかし綺麗きれいな顔で笑う人だな。思わず見惚みとれてしまつて何がおかしいのかわからなくなつてしまつたぞ。

『何か気になることでも?』

『えつと・・・』

何が気になつたんだ? ちょっと前の彼のセリフを思い出す。

『ふつん・・・。そんなに警戒しなくても大丈夫だよ』

これじゃない。もつと後だ。

『何か気になることでも?』

そつ、気になることはあるんだ。これより前。

『勇者を襲つなんてリスクの高いことではないから』

・・・・・。

『勇者を襲つなんてリスクの高いことではないから』

・・・・・。えつと・・・?

『勇者を襲つなんてリスクの高いことではないから』

・・・・・これだ！

勇者？俺が？そんなバカな・・・何かの間違いだ！

混乱が頭を支配する。ええいつ、考えてもわからないなら訊いてやれ！

「あの、つかぬことをお訊きしたいのですが」「うん？何ですか、勇者様」

面白がっている口調が不愉快だ。でも、今はもっと大事なことを確認するべきだ！・・・というか今まで勇者つて言わなかつたか？

「それ、何？『勇者』ってどうしたこと？！」

「どうしたこととは？君は勇者だ。その腰の聖剣『シクトラウス』が何よりの証拠。それ以外に、何の説明が要るのかな？」

さつさとは打つて変わつて真剣な表情を見せる。その視線が差す腰の剣を見やる。高そうだとは思つたが、まさか聖剣とは・・・。いや、これが聖剣とは限らないんじやないか？聖剣に似せて作つた贋作がんさくである可能性もある。聖剣なんて皆真似したがるだろつし、騎士志願者（仮）の俺が^{げん}験を担いで聖剣モードキを手にしていても不思議じやない。ああ、きつとそつだ！

「隠したつて無駄だ。その聖剣『シクトラウス』は刀身が淡く光つているはずだ。自分が勇者じやない、なんてあくまでしらを切りたいなら今ここでその剣を抜いて見せてよ」

光る剣？確かにそれは特別な感じがする。それに、おいそれと真似できない神聖さも漂うのだろう。ならば確かに抜けばわかるというものか。どの道、俺なんかが持つているような剣が聖剣だなんて

有り得ないだろ？

ベルトから剣を外す。右手で柄を握つて、ひとつ大きく息を吸う。胸がドキドキする。

一瞬だけ息を止め、次に吐き出しながら一気に引き抜く。途端緩い（ゆるい）光が目に入った。優しい光を纏つた刀身に目を奪われる。

綺麗だ。素直にそう感じる剣だつた。これが聖剣以外の何だつていうんだ。どこから見ても聖剣にしか見えない。

「ほら、それは聖剣だらう？？」ことは、君は勇者であると主張しているようなものだ

そんな青年の言葉が、時間をおいてゆっくりと浸透する。

・・・・・俺が勇者？本当に？もしそうなら、勇者を信じる人にとっても顔向けできない。世界を救う存在が記憶喪失なんて情けない。むしろ俺が助けて欲しいこの状況。

どうして俺が勇者なんだよ。おかしいだろ、いろいろと。しかし勇者は聖剣を持つ者の宿命。今からでも遅くない。勇者らしくするんだ・・！

意気込み一つ、青年に視線を戻す。

「で？勇者が何故こんなところに居るんだい？」

「残念ながらその質問には答えられないんだよ」

なるべく勇者っぽく威厳に満ちた口調で話してみた。青年が美しく笑つた。でもどこか懐のたのしんでいるような様子だつた。何かおかしな所でもあつただろうか？いきなり口調を変えたのがダメだつたのか？

「魔王を倒すのが目的の勇者様に「何故」、なんて訊くほうが間違

つっていたね」

俺は動搖を露とも知らず彼は勝手に納得してしまった。まだ愉しそうに笑っているし、元々こういう人なのだろう。

「勇者様はお仲間を連れたりはしないのかな？」

「仲間？いや、そういうわけじゃない、と思う」と思つ

「と思う？」

「あつ、いや、別に仲間を連れててもいいかなあつていう意味だ！」

危ない危ない。勇者っぽく言わなくては……。

「へえ、じゃあ今仲間はいなつてこと？」

「えつと、今はいない・・・多分」

記憶がないからどうしても断言できないが。もしかしたら、今は別行動をしているだけで本当はいるのかも、と思うとやっぱり「多分」がついてしまう。これ以上突っ込まれるようだったらもう本当のことを言つてしまおう。

「じゃあ僕が立候補して良いですか？」

「えつ？！」

予想外の言葉に驚いた。こんな不得体の知れない勇者（勇者なんだから正体はわかつているのだが）に誰がついて来るつて？思わず目の前の美しい顔をまじまじと見つめてしまった。

「認めてもらえた嬉しいな

「・・・」

魔王に挑むのだ、仲間はいるに決まっている。だけどまだ勇者としての心構えもできていない、どころか、記憶すらない自分についてくることが果たして良いことなのか。。。

俺は悩んだ末に結論を出した。

「ここはリーガルという街にある宿屋兼食堂だ。あの森から一番近かつた街である。俺とシユナイゼル（森で出会った美青年のこと。名前を訊いたらそう答えた）は、食堂の隅で顔を突き合させていた。

「ではまず、君の記憶を取り戻すことにしよう」

俺が記憶を失っていることを話した後のシユナイゼルの言葉だ。あつさり信じたし、仲間になることを翻したりしなかつた。本当に変わっている。大丈夫なのか、と俺のほうが心配になってしまつ。

「さしあたつて、一番に思い出してもほしいのは、名前、かな。なんて呼んだらいいのかわからなくて困るからね」

いや最初がそこがよーとジッコミかかつて止めた。なんだか無駄な気がする。それに俺自身、自分の名前を早く思い出したいと思つたから。

「でも思い出せうと思つて、思い出せるわけじゃないし……。どうしたらしいのか、全然わからないんだけど」

思考が行き詰つて、もはや勇者っぽく喋ることも止めてしまつた。早く思い出して安心したい。それが俺の切実な願いだ。いや、それよりも先に風呂に入りたい。まだ泥だらけの汚らしい姿のままだし。

だがシユナイゼルは、そんな俺の願いなど知らない。よつて適当な答えしか返つてこなかつた。それは例えば、「頭を打つたら思い出すんじゃないかな?」とか「記憶を失つた場所に行ってみるとか?」

などなど、である。

本気で言っているのだろうか？ だとしたら彼は、記憶探しなど本物ではないことを思っているに違いない。

「まあ、記憶を思い出すまでは「勇者様」って呼ぶよ

「こと笑ってそんなことを言ひ。それはそれで恥ずかしい。間違つてはいないが眞面目にうそ呼ばれるには抵抗がある。

止めて欲しい。そう言おうと彼を見るも、とっても愉しそうな笑顔を浮かべているだけだ。なんとなく名前を思い出した後も彼は「勇者様」と呼び続けそうな気がしてきた。妄想ではない、恥ずかしい未来を回避するため、頑張らなければならない。

そんな決意を密かに固めた俺の姿を見て、シュナイゼルは口を開いた。

「ま、とりあえず君はお風呂にでも入つてきたり？ 勇者様がそんな汚い恰好をしているのはどうかと思うよ」

「あ、ああ・。じゃあ今日はこれで解散しようか」

宿は同じだが取つた部屋は別々。なんだか信用されていないような、逆に一応の警戒心はあつてほつとしたような、微妙な気分になつた。

翌朝。俺の名前がわかつた。

それは朝、着替えたときに気がついた。着替えた、と言つても寝るときに脱いでいたシャツとズボンを着るだけなのだが。記憶を失う前はわからないが、今の俺は剣以外の持ち物はない。とにかく、シャツを着るとき何気なく見た襟の内側。そこに何か書いてあつた。

「・・ん？」

田を凝らして見てみるが、汚れと一体になつていて読めない。

「昨日洗つたなんだけどなあ・・・」

それほどまでに汚かつたのか、この服は。
数分、凝視して諦めた。しかし一体何が書いてあつたのか。何故か異様に気になる。

「そつだ！上着に書いてあるならズボンにも何か書いてあるかも・・・！」

思い付きだが良い案な気がする。早速既に穿いていたズボンを脱いで裏返す。どうでもいいが、パンツ一丁で色褪せたズボンを必死で見る男なんて、この上なく怪しくないか？誰もいない室内でよかつた。

場違いな考えを脇に置いて、ズボンを上から下まで見る。問題の文字、だと思われるそれはすぐに見つかった。ズボンの後ろ、尻部分の上、つまり腰が当たる部分に書いてあつたのだ。

「お、あつた。えと・・ん、ア?・・・ア、・・ア・・・・・・

「どうやら3文字で、アから始まる言葉だといつ」としかわからなかつた。

上着とズボン。その2つをベッドに並べて、文字を見比べてみると、一緒に・・・のような気がする。少なくとも、どちらも3文字前後の短い単語だ。

何だろうか。もしかしたら、俺の記憶を呼び覚ますものかもしれ
ない。
がぜん

俄然やる気が出てきて、自分の服の上に身を乗り出す。そこで部屋の扉が音をたてた・・・ような気がした。いや、扉が勝手に鳴るわけないのだから誰かがノックした音だろう。あまりに小さい音だったので勘違いかと思ったが、再び聞こえた。せりに、「勇者様?」という声も。

シユナイゼルだ。慌ててドアノブを掴むが、そこで今の自分を思
い出す。パンツ一丁のままだつた。さすがにこれで人前に出るわけ
にはいかない。3回目のノック。

「どうしたの、勇者様？まさか刺客に殺されてたりするのかな？」
「さうと酷いことを言つたな！・・・あー、今まだちょっと出られ
る格好じゃなくつて・・・すぐに行くから下で待つてくれないか
？」

まさか、パンツしか穿いていません、とは大声で言えない。どんなことを忘れていても、羞恥心はちゃんと備わっているようで安心した。そんなことを考えていると、扉の向こうで笑ったような音がした。

「なんとなく声掛けただけだから、まだゆづくつして良いよ」

という声がして、足音が去っていく。音が聞こえなくなつてから、手早く服を着る。

ショナイゼルはゆっくりしていて良いと言つていたが、待たせるのは悪い。謎の文字は気になるが、考へてもわからないなら、今は後回しだ。そう決めて、『ショトラウス』を手に取る。一度刀身を確かめてから身に着けようとする。

「・・・あれ？ これって」

不意に見た鞄に何か、引っかき傷のようなものがあるのを見つけて。まるで意図して付けたみたいに綺麗な傷跡きずあとだ。指でなぞつてみる。

「・・・なんか、文字、みたいだ・・・もしかして『ショトラウス』にも何か書いてあるのか？」

もう一度なぞつてみる。確かに、何か文字が書かれている。3文字の言葉だ。俺はそれを読んでみた。

* * * * *

「ふーん、で、何が書いてあつたんだい？」

昨日と同じテープルで食事を攝りつつ、先ほどわかつたことを報告する。俺としては、かなり重大な発見をしたと思っているのに、ショナイゼルは興味がなさそうな態度だつた。別にそれが不満というわけではないが、ちょっと悔しくて発見するまでを事細かに話し

てしまつた。おかげで、どうでもこゝとまで暴露してしまつた氣もあるが・・まあいいだろ?。

「とにかくーそこに彫られていたのは、人の名前だつたんだーそれつてひょっとしなくても、俺の名前つてことだと?ー。」

「の重大さを共有したくて、つい大声を出してしまつた。しかし、相変わらず彼は田の前の食事を、消化することを優先している。

「へえ~」

返事も生返事だ。

「・・・ちゃんと聞いてるのかよ?」

「聞いてますよ、勇者様。・・でも、温かいものは温かい内に食べたいじゃないですか」

「それはそうだけど・・・で、書いてあつた名前のことだが」「うんうん、ついに勇者様の名前がわかるんだね。皆お待ちかねだよ、きっと」

ようやくこちらを見て、にこつと笑つた。でも、『歯』って誰のことだ?このテーブルには俺達しかいないが・・・。

・・・まあ、いいか。そんなことより、俺の名前だ。

「そ、『シユトラウス』には、『アリト』って書いてあつたんだ

「ー。」

つまり、俺の名前アリトってことだ。そつやつて自覚すると、なんだかしつくりくる。「これが俺の名前だ」って確信をもつて言える。そのことが、どうしようもなく嬉しい。やつと俺の外観が見え

てきた気がする。

「ふんふん、アリト、ね。そういうえばそんな名前だったっけ」

「……は？」

今こいつ何て言った？

「……どうじうじうじだ？まさかお前、俺の名前を知つて隠してたのか？」

「隠してはいけないよ。噂で聞いたことあつたかな、つてレベルだつたんだ。といつてもつる覚えだつたし、本当かどうかわからないから黙つてたけどね」

「だとしても、言つてくれればよかつたのに。。何か思い出したかもしないだろ？そうすれば、こんな、「何て書いてあるんだ、これは」なんて考えなくてよかつただる」つ・・・

ぶつぶつと文句を並べ立ててみると、シユナナイゼルはびい吹く風でテーブルの上を片付けてくる。

「あ、そんなことより、もつ出発じよう」

食器をテーブルの片隅にまとめて、席を立つた。いつの間にかその手には荷物が握られている。

「出発つて・・・じこじこだよってか、「そななこと」とか一言で話で片付けるなよつ」

先ほどのこともあり、拗ねたような口振りになってしまった。しかしシユナナイゼルは、そのすべてを無視して意味深な笑みを浮かべただけだった。そして何も言わないまま、外へ向かう。俺を待つつ

もりもないようだ、振り向きもせずに歩いて行く。

仕方ない。いろいろ言いたいことはあるが、とりあえずついて行くことにする。

「で、どこに行くかぐらい教えてくれてもいいんじゃないかな？」

追いついた先で訊く。シュナイゼルは隣を歩く俺を見て頷いた。

「そうだね。行き先ぐらい知りたいよね。……ところで勇者様？ 勇者様は魔王がどこにいるか知ってる？」

「は？ 魔王？ ……知ってるわけないだろ」

何て言つたつて俺は記憶喪失中だからな。とか、胸を張れることじゃないけど。

「うん、もちろん今の勇者様も知らないだろけど、多分、記憶を失う前の勇者様も知らなかつたんじゃないかな」

「ん？ そんなことはないだろ？ だつて俺は魔王を倒すために旅してたはずなんだから」

「それがさ、魔王がいるつて世間一般に言われているのは『第三大陸』なんだけど、僕、実はそこに行つたことがあるんだ。あそこには魔王の居城^{きょじゆう}なんてないよ」

・・・『第三大陸』？ なんだそれは。というか、俺は今いところもよくわかつてないんだが・・・。

質問しようと口を開くが、先にシュナイゼルが話し出してしまった。

「魔王は今、『第一大陸』の近くにある、名もない孤島に住んでいるんだ。考えて『じりんよ。君の、その聖剣が創られた聖國家^{せいこっか}と、目

と鼻の先に魔王がいるんだよ？面白いよね

何が面白いのかわからない。だが先に、地理の確認がしたい。根本がわかつていないうからか、話の大部分が頭を素通りしてしまった。今までこそ、ヒューナイゼルの顔を見るが、またしても先を取られてしまった。

「まあ、魔王云々は今はどうでもいいよ。君には、先にやるべきことがあるからね。まず、」

「いやいや、ちょっと待てっ・・・！今の俺には地理の記憶もないんだ。名前だけ言われても全然想像できない！」

さりに何か言おうとするのを無理矢理遮った。ヒューナイゼルは、何か言いたげな顔をしたが、諦めたように溜息をついた。

「仕方ないな。じゃあ、まずは簡単に地理について説明するよ」

シュナイゼルの話を要約するに、俺たちが今いるのが『第二大陸』と言われるところで、国はない、街ごとに治められている、自治区と呼ばれる場所だ。そして、『第一大陸』はもともと発展している大陸で、大国が密集していいるらしい。『第三大陸』は、未開の地で行くだけでも大変な場所なのだとか。

「行くだけで大変な場所つて、なんでお前はそんな危ない所に行つたんだ？」

「ん？ さあ、なんでだつたかな？ それより、この3つの大陸は、北を上にして『第二』『第一』『第一』の順番で並んでいるんだ。そして、さつき言つた魔王の住む孤島は、『第一大陸』から見て北東に位置する海洋にあるんだ」

「へえ。・・この数字つて意味あるの？」

「ああ、この『第一』とか『第一』つていうのは文明の発展具合を表しているんだよ。だから『第一大陸』は一番発展していて、『第三大陸』は文明 자체がない、とされているんだ」

ふむふむ、と相槌あいづちを打つ。段々頭に地図が出来上がってきたぞ。といつても大陸の具体的な形がわからないから、大きなたらこが縦に3つ並んでいるような地図だが。まあ、今はなんとなくわかればいいよな！

「詳しいところは省くけど、後で地図とか手に入れたほうがいいんじゃないかな。田で見たほうがわかるからね」

「そうだな」

「で、本題だけど・・魔王の居場所がわかつても、記憶のない今の君が行つても危ないだけだよね」

「まあ、やつだな

今の俺は自分の身すら守れるか不安なぐらいだからな。

「そこで、先に君の記憶を取り戻そうと思つ。それは昨日も言つた通りなんだけど、実は、君の記憶を取り戻す方法に心当たりがあるんだ」

「えつ？ 本当か！？」

「こんなことで嘘は吐かないよ」

記憶を取り戻せる。それは願つてもないことだ。期待に、顔が笑みの形を作り始める。でも、名前がわかつてから良いことばかりが続いている。もしかしたら、そろそろ悪いことが起ころんじやないだろうか。そんな不安から笑みが中途半端になつて、怪しい顔になつてしまつた。

頑張つて笑みを堪えている俺と違つて、シュナイゼルは綺麗な笑顔を浮かべている。いや、綺麗というよりは、愉しくて仕方ない、お気に入りの玩具おもちゃを前にした子供のような笑顔だ。これから何して遊ぼうかな、とか言い出しそうな、そんな顔を見て、笑みが引っ込んだ。

何か嫌な予感がする。

「あれ？ どうかしたのかい？ もつと喜んでくれていいんだよ？ 念願叶うんだからさ」

「あ、ああ・。それで、記憶を取り戻す方法つてのは？」

まさか・・・頭を強打するとか、変な薬を飲ませるとか、そういうのじゃないだろうな。もしそうだつたら、全力でお断りしよう。魔王に挑む前に命がなくなる。

「うん、それはね・・・」

「それは・・・？」

「神官様に頼めばいいんだよ」

「?神官様?」

「そう。聖國家には神官つていう特別な役職があるんだ。その神官様は、祈りの力で様々な病気や怪我を治すことができるんだ。聞いた話では、記憶もある程度は戻すことができるらしいよ。どう?試してみる価値はあるんじゃないかな?」

確かにその話が本当だったら、試してみても良いかも知れない。それに、どうやら命に関わるような何かをされる心配もないようだ。なら、是非やつてもらおう。

「よし、じゃあ、聖國家に行つて神官様に頼んでみよつ・・・

とこひで、聖國家つてどこにあるんだ?」

「さつきの話聞いてなかつたのかい?聖國家は『第一大陸』にあるよ。でもここからじや船に乗つて行かなきゃいけないし、距離も大だ
いぶ
分ある」

「そうか・・・てか、俺、金なかつた。何か仕事しないと旅にも出れない・・・」

そう、俺の持ち物は今着ている服と、聖剣のみ、だ。金やその他荷物は、多分どこかで落したんだろう。そういうわけで、俺は現在無一文だつたりする。長期の旅になんて出る余裕はない。

「勇者が旅に出るために働くつて・・・、それはそれで面白いけど、いらない心配かな」

「どういう意味だ?」

「いやだなあ。勇者様は僕が何なのか忘れちゃつたのかい?・・・僕は魔法使い、だよ?『転移』の魔法くらい使えるよ

「いや、魔法使いだなんて今初めて聞いたから……」

「そうだったつけ？でも見たらわかるでしょ」

「見てもわかんないからつ！」

でもよく考えてみたら、魔法使いつぽい格好しているし、勇者の仲間になるつと言つているのだから何か出来て当たり前だろつし、推察しようと思えばできた、かも・・?・?・?・?・?。いや、無理だろ。

とか頭の中で推理したり、ツツコんだりしてから、目の前の青年に目を戻す。・・うん、見てもわからぬ。

「君の様子を見ていのるの愉しいんだけど、話を進めてもいいかな？」

「えつ？あ、ああ、いいよ」

「じゃあ、『転移』の魔法を使うから・・そうだな、被害が出ない街の外がいいかな。ついてきて」

そう言つてわざわざ歩き出しちしまつ。その後ろ姿を追いかけて俺も歩き出す。

『転移』の魔法つてそんな危険なのか？魔法のことは、当然思い出せていのい。そのせいか、どんなものなのか全く想像できない。

魔法とはどんなもののか空想している間に街を出て、誰もいな
い森の片隅かたすみにたどり着いた。

「『転移』がいいかな。じゃあ、『転移』させるね
「ちょっと待つて。『転移』つて危ないのか？」

「まあな。小さな物ならそこまで魔力はいらないけど、人間なんて大きなものを『転移』させようと思うと、大量の魔力がいるんだ。それが暴発したら・・危ないでしょ？」

「そ、そうだな」

膨大^{ぼうだい}な魔力^{まのり}が暴発^{ばくはつ}して、辺り一帯^{さま}が吹き飛ぶ^{さま}様を想像してしまつた。

「これって、俺は大丈夫^{だいじゆう}なのか？」

「何？勇者様は僕の腕を信用してくれないの？」

「いや、そういうわけでは・・・」

ただ、怖いだけ、とは言えなかつた。無駄な虚榮心^{きよえいしん}だが、言えないものは言えない。語尾を濁^{じご}した俺を見て何を思つたのか、シユナイゼルは心から愉しそうな笑みをこぼした。

「心配しなくとも、無事に送り届けるよ」

「あ、ああ。・・・送り届ける？一緒に行くんじゃないのか？」

「ああ、うん。さっきも言つたけど、人間を『転移』させるにはかなり魔力^{まのり}が要るんだ。それに、正確にコントロールしようと思うと、集中力も必要だ。だから、一人ずつ送つたほうが安全なんだよ」

「そうか・・・」

「そう。不安だとは思うけど、大丈夫。ちゃんと送るから」

「・・・うん。信用してます。頼むよ」

腹を決めてシユナイゼルの前に立つ。それを確認したシユナイゼルは、荷物の中から杖^{かか}を取り出した。

俺に向かつて杖を掲げて、何かよくわからない呪文を呴く。

「・・・・！」

変化は突然だつた。訳のわからない呪文を聞いていたはずが、ふいに体が軽くなつたのだ。そして一瞬の間^まの後^{のち}、着地したような軽い衝撃^{じょうげき}を受けた。

気が付いたら、どこか、暗くて広い所に出ていた。恐る恐る辺り

を見渡す。暗くてわかりづらいが、どうやら室内のようだ。それもかなりの広さがあるらしく、隅が見えない。近くに太い柱があるのが見えるが、それ以外は暗闇に呑まれていてわからない。暗さからくる本能的な恐怖に体が竦む。

何だつてこんなところに『転移』させたんだ。それに室内でなくともよかつたはず。。。次に来るはずのシユナイゼルに言つべき文句を頭の中に並べる。そうすることで、少し恐怖が紛れた。

そうだ。ここは聖國家のどこかなのだ。それにシユナイゼルが変な所に飛ばすはずがない。恐れることは何もない。

のほほんと、シユナイゼルを待つ俺は完全に油断していた。だから、この後、死ぬほど驚いたし、実際死ぬかと思う出来事に遭遇することになった。

「客を^{まね}招いた覚えはないのだがな」「・・・！」

突然暗闇から聞こえた声。そして、いきなり視界が明るくなつた。所々に置かれた灯りが広大な空間を照らし出している。

明るくなつた視界の中で、何かが動いた。それは、小さくて、羊のようなもこもこした体に、山羊^{やぎ}のような短い角^{つの}を持つていた。「それ」は床から30センチほど上に浮かんでいた。更に、黒い燕尾^{えんび}服^{ふく}・・のようなものを着ている。

なんだこの可愛い生物^{いきもの}は。

そんな感想^{かんそう}を持つて見ていると、「それ」が俺の近くまで飛んで（文字通り、宙を浮いたまま）きた。

「頭^{かしら}が高い！」

甲高い子供^{かんだか}の声が響いた。こんなところに子供^{こども}がいたのかと、顔を巡らせてみるが見つからなかつた。代わりに、やたらと偉^偉そうな男を見つけた。・・・距離^{きり}があるのに何故偉^偉そだなんてわかつたんだ、俺。自分の発想に疑問^{ぎもん}を覚えて、もう一度男を見てみた。

そいつは短い階段^{はし}の上、俺より高い位置^{じし}に、遠目でも歴史^{れきし}があることがわかる椅子^{いす}に座つていた。肘置き^{ひじ}にもたれた右腕^{うで}で顎^{あご}を支えている。目線^{めじん}は完璧^{かんぺき}に俺を見下^{さげ}していた。

これだ。この上から目線^{めじん}が偉^偉そだと感じた要因だらう。立ち位置^{じし}の問題なんて多分^{たぶん}関係ない。こいつなら逆の立ち位置^{じし}でも、見上げているのに見下^{さげ}ろす、という荒業^{あらわざ}をやってのけそうな顔をしている。

目が合つた。何か言つてくる。そう思つて身構えたが、予想に反する。

して何も言つてこなかつた。何故かと考えたが、すぐに思い至つた。距離があるからだ。遮るものがない空間とは言え、ちょっと大声を出さなければ届かない距離だ。

「貴様、頭が高いと言つておられたが！頭を下げよ！」

また子供の声だ。そういうえば子どもを探していたんだっけ。一度男の様子を見る。口を開く気はないらしい。やつたりと座つたまま動こうとしない。あの男は後回しにしよう。とりあえず先に声の主を見つけることにして、視線を下げる。足元でぴょこぴょこと羊（？）が跳ねている。それ以外目につくものはない。

明るくなつたとはいえ、広いこの部屋が隅々まで見通せるようになつたわけではない。柱の陰に隠れいたら俺には見えないだろう。かなり近くで聞こえたし、そちらの方が可能性があるか。なんて考えていようとまた聞こえた。

「これ！無視するでない！」

子供の声に似合わない老人のような喋り方だな。羊っぽいものが声に合わせて跳ねている。可愛らしくて、目的を忘れそうになる。思わずじっと見つめてしまう。

「返事をせんか！無礼者！…」

苛立たしげな声が響く。目の前には、まるで自分が喋っているかのように口を動かす羊らしき物体。

・・・・・まさか。

外見はファンシーな「それ」は、怒ったように腕を振り上げて、再び「無礼者！」と怒鳴つた。

「え・・えええーーー？」

「つるさいぞ！・・とにかく頭を下げろ！・跪け！」
ひざまづ

ぱーん、と「それ」は飛び上がって、俺の頭を小さい拳でぶん殴つた。

「いでつーーー！」

予想外に痛い。たまらず頭を押さえてしまがむ。

「跪け！あの方の前での無礼は、吾輩が許さんぞーーー！」

羊がぼこぼこ、と頭を叩いてくる。小さな見た目に反して、一撃一撃が重い。容赦のない攻撃に、意図せず跪いたような格好になってしまった。すると、ようやく攻撃が止んだ。

「つむ、それで良いのじや。魔王陛下の前では、常にその姿勢でいるようだするのじやぞ」

「・・・・・・え・・・？」

今・・・、聞いてはいけない単語を聞いた、ような気がする。

いやいや、聞いてない。俺は何も聞いてないぞ！俺の旅の目的が目の前に居るなんて、そんなことあるわけないからなつ！

「これいー！返事をせぬか、無礼者めがー！」

可愛い羊が横で起こつてているが、俺は壇上だんじょうの男から目を離せない。・・・・・わかつた。きっとあの人は聖國家の王様とかだ。羊も「陛下」って言ってたし、その前の単語は何か別な単語と聞き間違えただけだろう。そう考えれば納得だ。だって俺は聖国家に『転移』

してきただから。うんうん、当たり前だ。

一人納得した俺

遠いな

誰かの呟く声と、指を鳴らす音。

「うえあつ！？」

体が前に引っ張られた。とつさに踏ん張ろうと力を込めるが、両足とも畠を浮いてしまって意味を為さない。あつという間に男の姿が大きくなる。違う。近づいたのだ。と、引っ張つていた何かが消えた。しかし、飛んできた勢いまでは消えてくれなかつた。今度は床が急速に近づいてくる。反射的に体を丸めて衝撃に備える。
（じょうげき）
（そな）

「...」

頭を守る手に固い衝撃が。次いで体が転がる感触。最後にどこかの角に背中がぶつかって止まつた。

」・・・・・

打った背中が痛みでじんじんする。緩慢な動作で、丸まっていた体を伸ばそうとする。だが、体が思うように動かない。というか動きたくない。身動きすらできず、にいる俺の頭上から、怒鳴り声が降ってきた。

「貴様、魔王様の御前で何と無様な姿をしどるか！ しゃんとせい！」

また羊の言つ言葉が間違つて聞こえた。耳は駄目らしいが、他は

大丈夫だろ？

体中の感覚を意識する。そつすることで現状を理解しようと試みる。

どうやら俺は、先ほど見た短い階段に逆さまに伸びているようだ。ようやく自分の状態を確認できた俺は、頑張つて目を開けてみる。涙で滲む視界に、俺が飛んできたのとは雲泥の差で、ゆっくりと安全に到着した羊の怒り顔が入ってきた。今はその姿に可愛いなんて思つていられる余裕がない。というかこの羊、俺が声も出せないほど痛がつているのが見えていないのか？

「そもそも貴様、一体どこから入ったのじゃ。不法侵入じゃぞ」

小指の先ほども心配していないうだ。舌打ちしたいのを我慢して起き上がる。治まつたのか麻痺したのか、ある程度痛みが引いた体を立て直す。床に胡坐をかけて座る。やつぱり背中は痛いが、頭は正常に働きだしている。試しに今羊が言つていたことを吟味してみよう。

えつと、不法侵入がどうとかつて話だつたな。・・・いや、そもそも、浮いて喋る羊っぽいもの、という存在自体が常識外なやつに、常識を諭さとされたくない。それとも俺が忘れていただけで、この生物は普通に存在するものなのか？

「・・・『転移』して来た、か。何の用で俺の城に来た？」

俺が自分の中の常識を疑いだしたとき、背後から声がした。振り仰ぐと、壇上に立つた男と視線がぶつかる。

冷たい目だつた。他人に命じることに慣れた態度で、羊が言つていた「陛下」という呼び方がしつくづくる。ということは、この男は本当に王様だということだ。そつそつと、にわかに緊張してきた。

「陛下が直々に声をかけて下さっているのだぞ！返事をせぬか！」
「あ、えつと・・・」、「こ」はどこ、ですか・・？」

羊にせつつかれて、関係ないことを口にしてしまった。案の定、男は眉を顰める。

冷静になれ、俺。意識して呼吸を緩やかにする。そこで初めて、男の顔全体を見る余裕が出てきた。

まず印象的なのは、その冷たい目だ。冷たいどころか凍っているようだ。そのくせ瞳の色は、炎の赤。切れ長の瞳の上には整った眉。すつきりした鼻筋に、大き過ぎず小さ過ぎない口。それらが乗る肌は、白い。病的な白さではない、白さ。その白い肌とは対照的な真っ黒な髪。

ぱつと見ただけで、女の子にとてもモテそうな外見だった。

いろいろと負けた気分を味わいつつも、せめて姿勢だけは上品でいようと、できる限り綺麗に跪く。上手くいったかどうかわからないうが、視界の隅で騒いでいた羊が大人しくなったので、とりあえず良しとした。

意識を男に戻す。男は無表情で俺を見下ろしていた。俺が男を観察したのと同様、俺の全身を眺めているようだ。

「あ、あの・・」

沈黙に堪えかねて口を開く。男が俺と目を合わせてきた。

「何だ」

「え？いや、えつと・・、それで、こ」はどこなのかつていうのは・？」

失礼を承知でもう一度同じ問いを発する。考えないふりをしても、どうしても考えざる負えなくなってきたのだ。しかし、男は

何も言わなかつた。ただ視線を下へずらしただけだつた。

何だ？ 答えられないことでもあるのか？ それとも気を悪くした・・・？

だがすぐにそれらが見当違ひであることがわかつた。男の視線は俺の腰にある、聖剣『シュトラウス』を捉えていたのだ。

王様の前で武装しているのは如何にも拙い氣がする。慌てて弁解しようとするが、男がにやりと笑つたのを見て言葉を飲み込んだ。まるで待ち望んでいたものが来たかのよう、そんな歓喜に満ちた、それでいてどこか物騒な笑みだつた。

「意外と速かつたな

「はい？」

「だが、まあいい。さあ、始めるか

何のことを言つてゐるのかわからない。何かをやる気満々な男が、俺に向かつて右手を掲げる。俺はただ呆然とそれを見つめているだけだつた。

体中がとても痛いです。
思わず敬語が出てしまひべらに痛めつけられた。

「弱過ぎて話にならんな」

壇上から男の声^{がする}。何で、こんなことになつたのか。俺の身に起つたことは単純明快^{たんじゅんめいかい}だ。いきなり魔法で攻撃されたのだ。しかも連續で。反撃どころか、『シユトラウス』を抜く暇もなかつた。そして、あつという間に意識は彼方に飛んで行つてしまつた。気を失つていたのは、そんなに長くはなかつたようだが、おかげでダメージは少しも回復していない。

動かない体で、男の苛立^{いらだ}つた声を聞く。

「加減^{れん}してもなお、避けることすら出来ないとは・・・。貴様^{おなな}、鍛^{たん}錬^{れん}は充分に行つたのか? それに、仲間を一人も連れてこないとは・・・。『その胆力^{たんりょく}は良し』というものだがな、勝つためには手段を選んでいる場合ではなかつ。おかげでこちらは随分と退屈^{いたずら}だつたぞ」

なんだろう・・・。何で俺は、ぼほぼほされた^あ挙げ句^くに説教^あされていいるんだろう?

頭が痛い。攻撃を受けたから、だけではないだろう。どうしたらこんな、わけのわからない状況になるんだ。そろそろ限界だ。体的にも、頭的にも。

「うん? また気絶したのか? 軟弱^{なんじやく}この上ないな。・・・仕方ない」

盛大な溜息が聞こえた。

ふわつ、と体が軽くなる感覚がした。次いで労わるかのよつた優しいぬくもりが体を包み込む。心地良い風が頬を撫でる。体が動かないのをいいことに、ゆつたりとその感覚に浸る。しばらくそうしていると、やんわりと包み込んでいた空気が薄まってきた。やがて完全に消え、俺は目を開けた。気がつくと、体の痛みが全く感じられなくなっていた。

「痛く、ない・・？」

寝転がっていた体を起こす。あちこち触って確かめてみるが、どこにも痛みはない。不思議に思つていると、羊が目の前に飛んできた。

「貴様の傷を治したのは、魔王陛下である。感謝の言葉を述べるのじゃ！」

「・・・・・」

ああ、俺は本当に何と聞き間違えているんだろう。しかし、訊き返すのは躊躇^{ためら}われる。というか、普通に恥ずかしい。状況が許さなかつたとはいえ、最初に聞き直すべきだったな。反省反省。

「何故黙つたままなのじゃ。魔王陛下に失礼であるぞー。」

まだ良く聞こえないな。

・・・・・とか、現実逃避している場合^じじゃないか。ああ、本当に、何でこんな早くに、最終目標と出会つてしまつたんだろうか・・・?

ふと、シユナイゼルの愉しげな顔が頭をよぎる。考えまいとしていたが、ほぼ間違いなく、絶対、あいつのせいだ。でなければ、運命のいたずらだ。

今となつてはどつでもこことを考へながら、立ち上がる。改めて、魔王と向き合つ。

魔王は、最初に見たときと同じように、椅子に座つてこちらを見下ろしていた。先ほどと違うのは、その足元に、聖剣『シコトライス』が無造作に置かれているところだ。

さて、どうするか…。と考えるが、唯一の武器を取り上げられては、どうしようもない。とは言つても、完膚なきまでに叩きのめされた後で、もう一度戦う、なんて選択肢は浮かびもしないが。かといって、このまま殺される、という展開にはしたくない。なんかしなくては…！

せめてもの抵抗、ではないが、眼前の魔王を睨みつける。冷たい双眸が、俺を見据える。

「…何だ、その眼は。負けを認めないつもりか？それとも、言い訳でもするのか？」

小馬鹿にしたよつに鼻を鳴らす様は、『魔王』のイメージ通りだつた。

ここで怯んではいけない。腹に力を込めて息を吸い込む。

「違う」

「ほつ・・?では、何だ？」

「…話をしてほしい」

「話？」

そこで魔王は、考えるよつて口を開いた。冷めた視線は、俺の考えを読み取つとしているのか、少しも逸らされない。と、魔王が微かに笑つた。「面白い」。そんな声が聞こえてきそうな笑みだ。

「その話とやら、聞いてやる」

またしてもとこ‘うか、何とこ‘うか。記憶を失つてからの俺が出会うのは、何でこ‘う人の不幸を愉しんじやう手合いばかりなんだ。

あの時俺が話したのは、特に意外性もない、俺の現状だつた。つまり、俺の記憶がないつて話だ。その結果、俺は魔王の城に滞在することになつた。

「何でなんだ・・・」

あれは、時間稼ぎを考えての発言だつたのだ。そう、俺としては、あの場をどうにかできればよかつたのだ。そういう点から考えれば、成功したのだろうが・・・。

それにしれも、戦いを楽しみたい魔王に対し、「記憶を取り戻してから戦つたほうが楽しめるよ!」と言つたつもりが、何故こうなつた。魔王は受け取り方すら予想外なものなのか?

どう聞き取つたのか、俺の話を聞いた魔王は、こ‘う言つたのだ。
『面倒くさいな。今から、強くなるために鍛えたほうがよっぽど有意義だ』

思い出す度に、「ビ‘うしてなんだ」と思わずにはいられない。しかもその後、

『それに、ちよ‘うビ暇を持て余していたとこ‘うだ。並みの戦士では、手も足も出ないほど強くしてやろ‘う』

とか言つた。嬉々としてそう言つた魔王は、何て言つが、悪意の

塊のように見えた。俺に嫌がらせをしているよつこしか見えない。それからは、必死で抗議する俺を無視して話は進み、今に至る。いつの間にか城に滞在することになつたし、魔王直々に戦闘訓練を受けることになつっていた。

「どこので間違えたんだろうか・・・？」

可愛い羊に案内された俺の自室、といふことになつた一室で、俺は何度目かの溜息を吐いた。

何度思い出しても、現状を打破する方法がわからない。溜息ばかりが出てくるだけだ。そして、最後には必ず、あの魔王の嬉しそうな顔を思い出す。あれはどう考えても、俺をどのよつこにして痛めつけるか考えている顔だ。明日からの訓練とやらで、生き残れる自信がない。

「・・・はあ・・・寝るか」

つと、明日のことは明日考えよう。とりあえず今日は、これ以上何もないと良いな。そんな願いを胸に、やたらと豪奢なベッドに身を横たえる。目を閉じると、すぐに眠りが訪れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0223w/>

未来の伝説

2011年11月30日11時51分発行